

観光資源としての阿波踊りの成立過程とその要因

小林 勝法

How and Why Awa Dance Have Become Tourist Resources of Several Cities in Japan ?

Katsunori KOBAYASHI

The purpose of this study is to clarify a process that Awa dance developed into tourist resources and the factors that it spread out in all over Japan. Consideration was made with the memory magazines, newspaper articles of each place and many results of a historic study about Awa dance. Results of consideration are as follows.

- 1) It was a phenomenon to be seen nationwide that the Bon festival dance became an entertainment in spite that it was originally a religious event. Especially in Tokushima, the Bon festival dance was so great and grand that prohibition laws often appeared. And later, they became to dance at except a Bon festival in Tokushima. To change in name "Awa dance" from "Bon festival dance of Tokushima" was also a big change in reality. Awa dance became to be danced anytime and anywhere.
- 2) As a result of having worked on various invitations to pull in tourists with the Bon festival dance as tourist resources, Awa dance became to be known nationwide. The movies such as "Dance girl of Awa" and "Awa dance" were made. It may be said that they succeeded in making a brand.
- 3) With developing as tourists resources, Awa dance which was a simple dance originally, developed to have new dancers, unified costumes, and a stage dance. The styles of dance diversified and the skill of dancing became high. As a result, a charm as tourist attractions was to rise up and up.
- 4) Awa dance is suitable for the festival at a shopping street because of its characteristics such as "marching style", "cheerful and light tempo", "various styles of dancing" and "multistoried skills of dancing". Shopping districts of the whole country imitated success of Koenji in Tokyo and Awa dance spread out in all parts of Japan.

I. 研究の目的と方法

徳島の阿波踊りは毎年8月12日から15日までの4日間、夕方の6時から10時過ぎまで徳島市^{注1)}で繰り広げられる。徳島市内に設けられた7ヶ所の演舞場と8ヶ所の踊り広場などで踊りが披露されるが、その他にも市内中心部を車両通行止めをしているので、いたるところで踊られ、観光客もただ見物するだけでなく一緒になって踊り、楽しんでいる。阿波踊り実行委員会発表によれば、2004年の見物客はのべ136万人で、平均すると1日30万人を超えている。徳島市の人口が27万人程であるから、それよりも多い

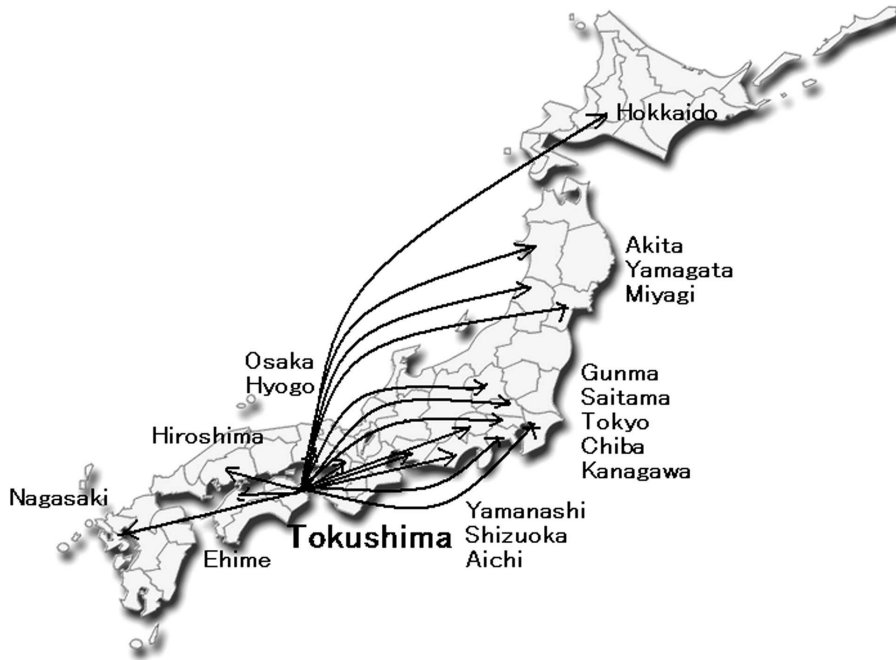


図1 全国に広がる阿波踊り

見物客が訪れていることになる。そして、のべ990の連（踊りのグループのこと）が参加したという¹⁾。演舞者の総数は約7万人とも言われ、日本で最大級の祭りである。因みに1日当たりの集客数が多いお祭りは、2002年の実績によると多い順に青森ねぶた祭り（355万人、6日間）、山形花笠まつり（90万人、2日間）、さっぽろ雪まつり（230万人、7日間）、そして、阿波踊り（130万人、4日間）である²⁾。

近年では「東北4大祭りを巡る旅」のように祭りや伝統芸能を観光資源として観光客を誘致することが各地で行われているが、民俗舞踊を観光資源化し成功したのは阿波踊りが先駆けではないかと思う。

そもそも民俗舞踊は、それが単独で存立しているというよりも、その地域の宗教的行事やその他の社会的活動の中に組み込まれて存在している。郷土芸能は郷土にあってこそ、その価値や意義を発揮できるのであって郷土を離れては存在しにくい。それに、その地域以外に伝播することを避けるために伝授する者を家の後継ぎに限定してきた民俗舞踊も数多くある。つまり、外に養子に出るかも知れない次男以下には伝授しないのである。したがって、そのような舞踊を見るにはその土地に行かなければならない。また、外の者が踊りたいと言っても許されないこともある。

しかしながら、もともとは徳島市に伝わる盆踊りであった阿波踊りは、徳島市から徳島県全域の市町村に広がった。さらには、東京や北海道など全国に広がり、その数は60を超えると言われて³⁾（図1）。例えば、高円寺阿波踊り（東京都）や大和阿波踊り（神奈川県）、南越谷阿波踊り（埼玉県）などがあり、これらは関東3大阿波踊りとも言われる規模の大きなお祭りである。このように、徳島の旧国名の「阿波」を冠した舞踊が徳島以外にも広がり、数多くの人が踊り、各地で観光資源となっているのである。

そこで、一地域の民俗舞踊が観光資源化し、なおかつ脱地域化していった希有な事例として阿波踊りに焦点をあて、その観光資源化の過程とその要因を明らかにすることを本研究の目的とする。

本研究は文献による研究であり、その文献資料は阿波踊りに関する歴史的研究の数々の成果のほか、各地の記念誌、新聞記事などである。

II. 観光資源化の過程とその要因

阿波踊りの歴史についてはかなり研究されているが、その起源になると未だ明確にはわかっていない。しかしながら、諸説ある起源説の中で一般に最も流布しているのは、四国を平定した蜂須賀家政が築いた徳島城の完成の祝いとして1585（天正13）年に領民が踊ったという説である。阿波踊りの地の唄の「よしこの」にも「阿波の殿様、蜂須賀公が今に残せし阿波踊り」と歌われている。この説は一般人受けするので、観光案内パンフレットなどにも盛んに引用されているが、歴史研究の立場からすると、創られた伝説という感じがしないでもない。郷土史研究家の三好は、史料を精査し、この徳島築城起源説を否定し、中世に流行した風流踊りに阿波踊りの源流を求めている⁴⁾。しかし、このように伝統的であることを強調したり、権威づけることで、阿波踊りの観光資源としての魅力が増している。

それでは、観光資源としての阿波踊りの成立の過程をその要因に分けて見ていくことにしよう。観光資源化の要因として、次の4つが考えられる。

- ①世俗化の促進
- ②観光化によるブランド化
- ③踊り方の多様化と高度化
- ④商店街向きの踊り

1. 世俗化の促進：宗教的行事から娯楽へ

近年では、盆踊りという「納涼盆踊り大会」などと称して、広場などに櫓を組み、その周りを輪になって踊る、すなわち地域の娯楽として踊られることが特に都市部では多い。しかし、盆踊りはそもそも仏教の宗教的行事である盂蘭盆（7月15日前後）の時に、死者の靈魂を鎮めたり、悪霊を追い払うためにおこなう踊りであって、郷土に密着した仏教行事である。例えば、徳島県でも各地に盆踊りが伝えられているが、その中でもっとも宗教的な色彩が色濃く残っているのは、徳島市内の漁村である津田に伝わる盆踊りであろう。徳島県の無形民俗文化財に指定されているこの踊りは、海難事故で亡くなった死者の靈魂を盆の時に迎えたり、送ったりする行事に付随して踊られるものである。死者に見立てたわら人形を海に流し、「帰って来よう」と叫びながら死者の靈魂を迎え、その後に皆で踊り始めるのである。

このような宗教的行事である盆踊りの宗教性が薄れ、娯楽化、すなわち世俗化してきたのは室町末期からだという⁵⁾。この現象は全国的に見られることであり、徳島に限ったことではないが、徳島の場合はその規模が大きかった。三好は、「元禄期（1688～1704年）には、阿波藍（特産の染料）の売れ行きが急増し、町人社会は大いに潤い、盆踊りも大阪で流行していた「俄」が城下に伝わり、その影響で芸能や衣裳も華美になり隆盛を極めた」と述べている⁶⁾。徳島は日本で有数の藍の産地であり、当時大きな繁栄期を迎えていたのである。

江戸時代の「俄」とは、茶番や寸劇のようなもので、「走り俄」や「歌舞伎俄」「衣裳俄」「座敷俄」などがあり、臨時にこしらえた舞台でも演じられたという。それから「組踊り」があり、数十人によって踊りと出し物が披露されたという。残念ながら、これらは現代には伝承されていない。後述するが、現在行われている俄連や組踊りはこれらと別のものである。しかし、現在行われているようにお

囃子に合わせて踊り、市内の所々を踊り流す「騒めき踊り」もあった。このように現在では想像できないくらいに数種類の踊りが盛大に行われていて、1775（安永4）年には徳島藩が組み踊りを禁止するなど、幕末までたびたび禁止令が出るほどであった⁷⁾。

徳島では盆踊りが盛大な娯楽となっていたものの、1907（明治40）年頃までは、踊るのは盆の時期に限られていた。盆踊りであるのだから当然と言えよう。ところが、1908（明治41）年4月に皇太子が徳島県に來訪した際の奉祝会や徳島市開市20周年祝賀会（1909年11月）など、さまざまな祝い事の時にも踊られるようになった⁷⁾。すなわち、盆とは関係なく踊るようにもなったのである。そこで、盆以外の時に踊るのに「盆踊り」と呼ぶのもおかしいので、その場合には「阿波踊り」と呼ぶようになり、これが一般化したという。「阿波踊り」という名称の誕生である。それまでは、地元では単に「盆踊り」と呼称していたし、外からは「徳島の盆踊り」と呼んでいたに過ぎなかった。

「阿波踊り」という名を得て、盆という郷土的な宗教行事から離れたことにより、阿波踊りは名実ともに世俗化したのである。つまり「盆踊り」でなくなったのである。そして、時期と地域を超えて踊られる可能性を持ったことになる。

2. 観光化によるブランド化：「徳島の盆踊り」から「阿波踊り」へ

藍産業が衰退してくると、徳島の地域活性化と観光客誘致を目的として阿波踊りを活用しようという動きが明治時代末期から見られるようになった。そして、それは大正期に本格化する⁸⁾。1898（明治31）年に在神戸ポルトガル領事として日本に移り住んだW.de.モラエスは、「長いあいだ住んでいた神戸で、私は徳島の人たちからその驚嘆すべき『ほん・おどり』のすばらしさについてよく聞かされていた」と記している⁹⁾。そして、実際に見物に出かけている。このように明治時代末期には近畿地方にも知られる踊りとなっていたのであろう。

昭和になってからは、商工会議所や観光協会が、演舞場を設けたり、宣伝用のポスターやパンフレットを県外に配布したり、鉄道や船、宿泊料の割引をするなどして、観光客を誘致し、大きなお祭りとして発展させてきた。戦後間もない頃の徳島新聞には次のような記事が見られる。

「今年は観光客誘致を兼ねて縣商工會議所、観光協会が徳島駅前に元町大競演場を特設、大々的宣伝に乗り出した」（昭和24年7月27日）

「阿波踊りは特殊なものだから一つ縣外に乗出そうじゃないかということ考えた」（昭和24年8月3日）

「船と汽車で縣外客大勧誘」（昭和25年8月26日）

その結果、現在では、前述したように4日間で130万人を超える見物客でにぎわう全国でも有数のお祭りとなっている。

「阿波」とは徳島県の旧国名であるので、それを徳島県の一部でしかない徳島市の踊りの名称とするには正確さに欠けると言える。しかし、そのようなことに頓着せずに、「徳島の盆踊り」であったものを「阿波踊り」として誘致活動を繰り広げた。確かに、「阿波踊り」の方が「徳島の盆踊り」よりも伝統とユニークさを感じ、魅力的であろう。1941（昭和16）年には「阿波の踊子」という映画も制作されており、阿波踊りの知名度を一層上げたに違いない。この映画は1957（昭和32）年にはタイトルをそのままずばり「阿波おどり 鳴門の海賊」に変え、再映画化されている^{注2)}。

以上見てきたように、「阿波踊り」は全国的に知れ渡るブランドとなったのである。

3. 踊り方の多様化と高度化

阿波踊りは2拍子のリズムに合わせて手足を同時に左右交互に前に突き出しながら踊る踊りで、「手を挙げて足を運べば阿波踊り」と言われるように元来単純な踊りである。ただし、踊りのバリエーションは豊富であり、踊り手によって好き勝手に踊られてもいた。

ところが、観光資源化が進むにつれて、踊り方がさらに多様化し、技術も高度化してきた。この点について、①踊り手、②衣裳、③鳴り物、④踊り方、⑤組踊り、⑥演舞場と舞台踊りの5点にまとめて説明しよう。

(1) 新しい踊り手の誕生

江戸時代に描かれた絵や昭和初期の写真を見ると、踊っているのはほとんどが大人たちである。男性は浴衣の裾をまくり上げて腰を低くして踊り、女性は浴衣姿で跳ねるように踊るか三味線を奏でるかである。ところが、戦後になってから、新しい踊り手として、子供（写真1）と男踊りをする女性（写真2）が現れた。その結果、現在では、子供の女踊り、子供の男踊り、女の男踊り、男踊り、女踊りの5種類に増えている。

もともと盆踊りであるから、踊り手は地域住民であったが、徳島市が商工業化されるにともなって、職場を単位として踊る連（グループ）も現れた。近年ではこれらを企業連と呼称している。その他にも学校を単位として連を結成している場合もあり、大学では地元の徳島文理大学や四国大学が大人数からなる連を結成している。徳島大学は学部や学科ごとに連を結成していて、例えば、医学部は竹の子連という。「末は名医かやぶ医者か」の謂いだそうである。地元以外からの常連としては、文教大学のほか、東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、専修大学、京都大学、同志社大学などがある。

これら地域や職域、学校などのほかに、それらの枠を超えて同好の志によって結成される場合もあり、それらのうち規模も大きく技術も優れた連は有名連と称されている。これらの有名連はいわばセミプロで阿波踊り期間中は演舞場で優先的に踊ることができるし、祝賀会や記念式典などの様々なイベントに招待される。徳島市では結婚披露宴でお祝いとして踊られることもある。また、東京や神奈川などの徳島市以外での阿波踊りに招待されることもあり、これらのようなときに得られる出演料は年間2

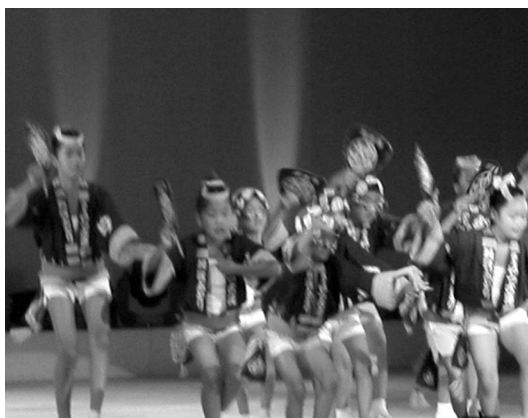


写真1 子供踊り



写真2 女の衣裳

千万円を超える有名連もあるという。会員数もほとんどが100名前後で、最も多い娯茶平連は300人に達している。これらの有名連は協会を組織していて、それらの協会名と会員数は次の通りである（2004年8月現在）。

阿波踊り振興協会（16連）

徳島県阿波踊り協会徳島支部（17連）

阿波踊り保存協会（9連）

（2）衣裳

古くは踊り手はそれぞれ自前の浴衣を着用していたが、後に述べるように、整列して、マスケームのように様々なフォーメーションを組んで踊るようになるにつれて、衣裳を統一するようになった。普段から着ている浴衣ではなく、踊り専用の衣裳を連ごとにあつらえるようになる。それぞれの連名を染め抜いた揃いの浴衣であり、いわばユニフォームである。1955（昭和30）年8月12日の徳島新聞には、「新調のそろいのユカタがつぎつぎに登場」という記事が掲載されている。

そして、前述した踊りの形態や踊り手によって着用する衣裳が異なる。一般的には、子供踊りと女の男踊りは法被、男踊りは法被か浴衣、女踊りは浴衣を着用している。近年では女の男踊りでも浴衣で踊る例も見かけるようになってきた。

女踊りの衣裳は、現在では（写真2）のように、どの連も編笠をかぶり、黒朱子の帯を締め、下駄を履いている。このような姿は鳥追女の恰好であって、阿波踊り固有の衣裳というわけではない。三隅によれば、「編笠を深くかぶり、木綿の着物に小倉の帯、紅染の手甲、日和下駄のよそおい」が鳥追女の姿であって、「阿波踊りをはじめ、各地の盆踊りがしきりに鳥追スタイルを採用する」ようになったという¹⁰⁾。そもそも鳥追いの行事は正月行事であるから、その姿が夏の盆に現れるというのも不思議である^{注3)}。

古い写真や絵を見ると、明治初期までは常磐笠で、それから饅頭笠、そして鳥追笠へと変遷している。しかも、戦後は笠の後ろを高くした粋なかぶり方をするようになってきている。

そして、現在では浴衣を腰までからげて着ているが、着付けの変遷を津田の写真集『阿波踊り 撮った踊った40年』から見てみると、昭和20年代はまるっきりからげないか、からげても膝上くらいまでであった。近年のように腰が隠れる程度にまでからげるようになったのは昭和40年代からである¹¹⁾。それから、片肌を脱いで長襦袢を見せる着付けをしている連もある。

（3）鳴り物

江戸時代に描かれた絵、例えば、「阿波盆踊図屏風」（1850（嘉永3）年、吉成霞亭作）を見ると、三味線の他に、小太鼓、鼓、ラッパなどがお囃子の鳴り物として描かれている。時代が下って、大正期には、バイオリンやクラリネット、アコーディオン、胡弓なども登場する。踊りも自由奔放であったし、お囃子も鳴るものなら何でも良いというような感じであった。現在では、三味線と横笛、鉦、締太鼓、大太鼓の5種が基本であり、その他に、鼓やたらい^{かね}などが加わることがある。

お囃子の前を踊り手が進むというスタイルは今も昔も同じである。戦後、踊り手の人数が多くなり、隊列が長くなると隊列の先頭の方はお囃子の音が聞こえない。そこで、大きな音が出せる大太鼓が近年ではお囃子の主流となってきた。中には、大太鼓だけの連もあるくらいである。



写真3 提灯踊り



写真4 扇踊り

(4) 踊り方

好き勝手に踊られていたのが整列し統一して踊るようになると踊り方もいくつかの様式として認識されるようになってきた。現在、見られる踊り方について述べよう。

男踊りには、差し足と引き足、団扇踊り、提灯踊り、やっこ踊り、あばれ踊りなどがある。差し足とは前に踏みだすときにつま先から着地する歩み方で、サッサツときびきびした動きである。女や子供の男踊りに多く見られる。一方、男は引き足が多く、一度前に出した足のつま先を接地したまま手前に引き寄せながら着地する歩み方で、粘りのあるユーモラスな動きである。

団扇や弓張提灯を持ち、それらを様々に振り回しながら踊る踊り方が団扇踊りと提灯踊りである(写真3)。団扇は子供や女も使用し、時には両手に一枚ずつ持って踊る場合もある。一方、弓張提灯は主に男が使用し、時に激しく振り回す。このような小道具を使うことによって、素手だけよりも踊りが大きく、そして複雑になり、高度な技術が要求されるようになった。

やっこ踊りは法被や浴衣の袖口を持って左右に広げ、奴凧のような恰好をして、袖を交互に上下させたり、左右同時に閉じたり開いたりしながら踊る踊り方である。他の場合は腰を曲げ、前にかがみながら踊るのに対し、この踊り方は腰を伸ばし棒立ちになったり、片足跳びしたりする。女にも同様の踊りがあり、これらは次項の組踊りで後述する凧踊りから派生している。

あばれ踊り(跳び踊りともいう)は激しく飛び跳ねながら踊る踊り方で、豪快さと自由奔放さが表現される。体格が大きく体力のある男の踊りである。

女踊りは通常は腰を伸ばし、やや前傾して両手を高く挙げ、下駄の先と前の歯だけで立ちながら踊るが、この他に扇踊りとやっこ踊りがある。扇踊りは扇を持って、ひらひらと翻しながら踊る踊り方である。両手に一枚ずつ持って踊る場合もある。(写真4)

やっこ踊りは男の場合と同じように奴凧のような恰好をして、カッカツと下駄を大きく踏みながら踊る踊り方である。いくつかのバリエーションがあるが、小刻みな動きであり、通常のしなやかな踊り方に対して、躍動的でキュートな踊り方である。

(5) 組踊り

踊りをより良く見せるために、子供踊りや男踊り、女踊りのどの踊りも整列して様々なフォーメーションを組んで踊るようになった。これを組踊りと言うが、整然と踊る様は美しいし、子供たちの踊



写真5 市役所前演舞場



写真6 舞台踊り

りは愛らしい。また、男踊りはフォーメーションを組みながらも好き勝手に踊ったりする場合もあり、自由奔放さやひょうきんな面を楽しむこともできる。

組踊りをするためには、ただ前進するだけでなく、後退や斜め歩き、方向転換、一回転、スキップ、一時停止などの技術も必要である。そのため、それらの踊りやフォーメーションに習熟するために練習の時間を要するようになり、有名連と言われるようなセミプロ集団では年間を通して練習するようになっている。その結果、連ごとに様々な特色が現れた。

中でも凧踊りは奴凧に扮した踊り手とそれを操る踊り手とによる寸劇のような踊りで、アクロバティックな要素もあるユーモラスな踊りである。

(6) 演舞場と舞台踊り

演舞場、すなわち観覧席が設営される会場は7カ所あり、そのうち4カ所が有料である。観覧料は2時間で1000円から1800円である。18時から20時と20時半から10時半の2部に分かれており、入れ替え制となっている。当日では入場券を手に入れるのが難しいほどの人気である（写真5）。

この演舞場のもとには戦後まもなく始めた審査場である。1947（昭和22）年に始めて設けられたが、「終戦直後の踊りを盛り上げるとともに基準の形を保つためにやった」とのことである（徳島新聞、昭和27年9月7日）。この審査場は後に競演場や観覧場を経て現在の演舞場となるわけである。

それから、通りを流して踊るだけでなく舞台でも踊るようになった（写真6）。舞台踊りでは照明やスモーク（ドライアイスの煙）など様々な演出が施されるようになり、それにつれてますます高度な踊りが要求されている。お囃子も緩急をつけたり、急に止めたり、ソロで演奏したりと高度な演奏技術が必要になってきている。

市内の阿波踊り会館では毎日、演舞が行われているが、徳島阿波踊り期間には、「選抜阿波踊り」と称して、一日に3回（11:30～、13:30～、16:00～）、徳島市文化センターと徳島県郷土文化会館の2カ所で有名連による演舞を楽しむことができる。観覧料は1500円であるが、こちらも当日では入場券を手に入れるのが難しいほどの人気である。

このように観覧席を用意して踊りを見せることによって、観光資源としての価値が一層高まってきた。

4. 商店街向きの踊り

阿波踊りは本来徳島市あるいは徳島県内で踊られる踊りであるが、徳島の連が徳島県外に出張して踊ったり、徳島県出身者が集まって踊るようなことはあった。例えば、東京には徳島県人会によって1953（昭和28）年に結成された木場連（現在は天恵連と改称）がある。しかし、徳島とは縁もゆかりもない東京の高円寺で1957（昭和32）年から阿波踊りが踊られるようになったのである。しかもこれは全くの偶然によるものであった。

阿波踊りが始まる前の高円寺は取り立てて特色のある街ではなく、当時は隣駅の阿佐ヶ谷商店街が行う「阿佐ヶ谷七夕まつり」が人気を呼んでいたという¹²⁾。この人気に触発され、高円寺の商店街の振興組合に発足したばかりの青年部が阿佐ヶ谷に対抗する行事として考え出したのが、阿波踊りであった。その時に次のような意見が交わされたという¹³⁾。

「この商店街には広場がないから、盆踊りみたいに場所をとるものはだめだ。大きな御輿をかつぐにも、道が狭いからなあ」

「阿波踊りはどうだろう？ 道を練り歩けるからいいじゃあないか？」

このようにして、話はまとまったものの、誰も阿波踊りを知らないため、「高円寺ばか踊り」と称して、第一回のお祭りをを行うことになった。その後、本物志向が高まり、木場連の指導を受けたり、徳島へ学びに行ったりした結果、技術的にも向上し、海外遠征をするようにまで発展してきている¹⁴⁾。

高円寺阿波踊りが「東京」の「阿波」踊りとして有名になってからは、東京だけでなく全国の商店街でも商店街と地域の活性化のための新しいお祭りとして、阿波踊りが行われるようになってきている。例えば、東京だけでも高円寺の他、三鷹、大塚、神楽坂、小金井、板橋、亀戸、糀谷など20カ所を超えている。

商店街活性化の手段として活用されるのは以下のような阿波踊りの特長による。

①行進式であること

現在の阿波踊りは踊りながら街を練り歩く「流し」から発展した。夏祭りとして一般的な盆踊り大会のように広場に櫓を組み、そのまわりを輪になって踊るのではなく、隊列を組んで一方向に進む。そのため広場を必要とせずに、商店街を演舞場にできるので、商店街向きである。また、山車や御輿のような大がかりなものも必要としないので、わりと簡便に始めることができる。

②軽快で陽気なテンポであること

日本の民俗舞踊の多くはゆっくりとしたテンポで落ち着いた曲であるが、阿波踊りは速いテンポであり、軽快で陽気なリズムである。三室によると、阿波踊りのお囃子の速度はM.M.♪ \approx 152のアレグロで、他の盆踊りよりも急速であるという¹⁵⁾。阿波踊りは現代的感覚に合っているとさえよう。

③踊りが多様であること

前述したように踊りの形式が多様化してきたので、連ごとに特徴を出せる。その結果、多数の連が参加できるし、観客を飽きさせない。例えば、徳島の選抜阿波踊りでは2時間で6つの有名連が出演するが、観客は飽きることなくそれぞれの特徴のある踊りを楽しめる。

④技術が重層的であること

前述したように2拍子の単純な踊りなので、誰にでもすぐに踊れる踊りである。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々」というわけで、踊りたい観光客のために俄連が組織される。観光客を集めて有名連が踊りを講習し、そのまま即席の連を結成し、演舞場に躍り込むのである。徳島では踊り期間中2カ所ですべて毎日2回ずつ開催し、多数の人がこれに参加している。

他方、踊りの技術は多様化し高度化しているので、熟練者は熟練者なりに高度な踊りを楽しむこと

ができる。その結果、踊り集団の連がセミプロ化しているのは前述した通りである。

Ⅲ. まとめ

阿波踊りに関する歴史的研究の数々の成果のほか、各地の記念誌、新聞記事などを資料として、阿波踊りが観光資源化し、日本全国に広がっていった過程とその要因を明らかにすることが本研究の目的であった。考察の結果は以下の通りである。

- 1) もともと宗教的行事であった盆踊りが娯楽化するの全国的に見られる現象であって、徳島でもたびたび禁止令が出るほど盛大な盆踊りが行われていた。徳島の場合はさらに、盆以外の時にも踊られるようになり、世俗化が促進された。「徳島の盆踊り」から「阿波踊り」と名実ともに変化し、いつでもどこでも踊られる踊りになった。
- 2) 盆踊りを観光資源として集客しようと様々な誘致活動をした結果、「阿波の踊子」「阿波踊り」などの映画も作製されるなど全国的に知れ渡るお祭りとなった。観光化によるブランド化に成功したと言える。
- 3) 元来単純な踊りであったが、観光資源化が進むに連れて、新しい踊り手が誕生したり、衣裳が整えられたり、舞台踊りが現れるなど、踊り方が多様化し、技術も高度になった。その結果、観光資源としての魅力も高まることになった。
- 4) 阿波踊りの持つ特性、すなわち「行進式」「軽快で陽気なテンポ」「多様な踊り」「技術が重層的」が商店街で行うお祭りに適している。東京高円寺での成功に全国の商店街が倣うようにして日本各地に広まった。

(付記) 本研究は2003年2月にバンコクで開催されたThe 1st International Conference and Festival on Traditional Plays, Games and Sports において口頭発表したものに加筆したものである。

注

- 1) 徳島市：徳島県の県庁所在地で商工業都市。人口27万人。
- 2) 「阿波の踊子」：マキノ正博監督、長谷川一夫、高峯秀子主演、東宝映画。
「阿波おどり 鳴門の海賊」：マキノ雅弘監督、大友柳太朗、丘さとみ主演、東映京都。
- 3) 鳥追いとは、「農村行事の一。正月14日の晩と15日の朝との2回、害虫を追い払う歌を歌い、若者らが、ささら・槌・杓子・棒などをうって家々を回るもの。江戸時代には女芸人が新年に編笠をかぶり、三味線を弾き、鳥追い歌を唄いながら門付けしたもの。」(広辞苑)

文献

- 1) 徳島新聞、2004年8月13日～16日
- 2) 財団法人日本交通公社編、『観光読本（第2版）』、東洋経済新報社、2004年、pp.148-149
- 3) 週刊朝日百科日本の祭り、9号、朝日新聞社、2004年、p.32
- 4) 三好昭一郎、「阿波踊り起源考」、阿波おどり研究会編、『阿波おどり』、第1号、阿波おどり研究会、1993年、pp.2-7
- 5) 新村出編、『広辞苑（第二版）』、岩波書店、1969年

- 6) 上掲書3)、p.5
- 7) 徳島市立徳島城博物館、『阿波踊り今昔物語』、徳島市立徳島城博物館、1997年、pp.34-35
- 8) 石川文彦、「新聞に見る阿波踊り」、阿波おどり研究会編、『阿波おどり研究』、第6号、阿波おどり研究会、1993年、pp.34-67
- 9) W.de モラエス、(岡村多希子訳)、『徳島の盆踊り』、講談社、1998年、pp.22-23
- 10) 三隅治雄、『日本舞踊史の研究』、東京堂出版、1968年、pp.171-173
- 11) 津田幸好、『阿波踊り撮った踊った40年』、第一出版、1987年
- 12) 松平誠、『都市祝祭の社会学』、有斐閣、1990年、pp.242-244
- 13) 40周年記念誌編集委員会編、『おどれ高円寺 高円寺阿波おどり四十周年記念誌』、東京阿波踊り振興協会、1996年、p.11
- 14) 同上書、pp.11-26
- 15) 三室清子、「観光化された盆踊りの研究」、『岡山大学教育学部研究集録』、第23号、1967年、pp.67-80

